

1 芸術科を通したキャリア教育実践についての基本的な考え方

高等学校学習指導要領では、芸術科の目標を、「芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」と定めています。

また、特にキャリア教育と関連性が深い内容として、生涯学習社会の一層の進展に対応するため、音楽、美術、工芸及び書道のすべての科目の目標にも「生涯にわたり」の表記が加えられており、生涯を通じて芸術を愛好する心情を育てることが示されています。以下は、『高等学校学習指導要領解説 芸術編』（平成21年12月）に示された「芸術科改訂の趣旨」に関する記述の抜粋です。芸術科を通したキャリア教育の意義がここからも読み取ることができます。

高等学校学習指導要領解説 芸術編 《抜粋》

芸術科改訂の趣旨

(1) 音楽、芸術（音楽）

(i) 改善の基本方針

- 音楽科、芸術科（音楽）については、その課題を踏まえ、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむことなどを重視する。

(2) 図画工作、美術、芸術（美術、工芸）

(i) 改善の基本方針

- 図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）については、その課題を踏まえ、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する。

さらに、上記目標には「芸術文化についての理解を深め」ることが新たに加えられています。例えば音楽は音を媒体としたコミュニケーションと考えられますが、その表現は社会や文化の有り様と深く関わっています。地理的・文化的・歴史的などの広い視野で芸術に目を向け、その理解を深めていくことは、この分野を学習する上で極めて重要であると考えられます。また、改正教育基本法においては、教育の目標に伝統と文化の尊重が規定されています。我が国や郷土の伝統文化を理解し愛着をもち、それを基盤として諸外国の様々な文化を尊重する態度の育成を重視することは、芸術科の重要なねらいとして位置付けられており、今回の改訂で目標の中に規定されたことと合わせ、特に地理歴史科との関連性が深いことから、キャリア教育の視点をもち学習活動を進めることも期待されます。

このほか、例えば音楽Ⅰ「3 内容の取扱い（6）」では「内容のBの指導に当たっては、楽曲や演奏について根拠をもって批評する活動などを取り入れるようにする」、美術Ⅰ「3 内容の取扱い（4）」では「内容のBの指導に当たっては、作品について互いに批評し合う活動などを取り入れるようにする」と示されているなど、言語活動の充実が図られています。このことは特に国語科との関連性が深いことから、上記同様キャリア教育の視点をもち、横断的・総合的な学習活動が行われることが期待されます。

2 高等学校における芸術科の指導内容とキャリア教育 －「基礎的・汎用的能力を視点として」－

芸術科においては、生徒が行う幅広い表現活動や鑑賞活動が、基礎的・汎用的能力としての「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」等の育成につながると考えられます。作品を形づくっている諸要素を知覚することや、そのよさを感じ取り、思考・判断し表現する力の育成を重視することが各種能力の向上に結びつくよう、系統的な指導に取り組むことが重要です。

以下は、芸術科（音楽、美術）の内容と、キャリア発達に関わる「基礎的・汎用的能力」と関連する部分をまとめたものです。

「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する芸術科の指導内容の例

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
音楽	<ul style="list-style-type: none"> 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら表現を工夫して歌ったり、演奏したり、つくったりする。 楽曲の文化的、歴史的背景や表現の特徴を理解して鑑賞し、根拠をもって批評し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 曲想を楽曲の背景と関わらせて感じ取り、イメージをもって歌ったり、演奏したりする。 楽曲の文化的、歴史的背景や表現の特徴を理解して鑑賞し、根拠をもって批評する。 	<ul style="list-style-type: none"> 曲種に応じた発声の特徴や、楽器の音色や奏法の特徴を生かし、表現を工夫して歌ったり、演奏したりする。 音階を選んで旋律をつくったり、音素材の特徴を生かし構成を工夫してつくったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 我が国や郷土の伝統音楽、アジア地域の諸民族の音楽を含む諸外国の様々な音楽の特徴を理解するとともに、多様性を感じ取り、鑑賞する。
美術	<ul style="list-style-type: none"> 感じ取ったことや考えたことなどについて、根拠を明らかにして自分の考えを述べたり、生徒同士で批評したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 意図に応じて材料や用具の特性を生かすなど、表現を工夫する。 表現方法を工夫し、主題を追求したり、目的や計画を基に表現したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 表現形式の特性を生かし、形、形体、色彩、構成などを工夫して創造的な表現の構想を練る。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の美術の歴史や表現の特質、日本及び諸外国の美術文化について理解を深めるとともに、多様性を感じ取り、鑑賞する。

価値観の多様化が進む現代社会においては、様々な他者を認めつつ、他者と協働していく力が必要になります。そのような中で、芸術の授業において解釈したことや自分なりに判断したことを基に批評し合うなど、諸活動を通して異なる価値観を共有することが大切です。

専門教科「音楽」「美術」に関する取組

両教科に関する専門的な学習を通して、感性を磨き、創造的な表現と鑑賞の能力を高めるとともに、文化の発展と創造に寄与する態度を育てるのが目標です。

特に「声楽」及び「器楽」については、他者と協調しながら活動することによって、より一層幅広い表現の諸能力を養うことが求められています。

3-1 実践例 《音楽・第1学年》 心をつなぐアンサンブル活動

想いを伝えるコンサートづくり

■ ねらい

アンサンブル活動を通して、様々な音楽表現を工夫しながらその楽しさや喜びを味わうとともに、楽器の特性を理解する。自主性・協調性を養い、主体的・創造的に表現する。

■ 本実践とキャリア教育

アンサンブル活動では、個人と集団との関わりを大きく取り上げることができます。

お互いの演奏イメージを伝え合い、課題について指摘し合うことによって協調性やチームワークの大切さに気付くことも期待できます。人間関係を形成する上で必要なコミュニケーション能力が向上できる、有意義な活動となるでしょう。

《全体構想》

主な学習活動	時数	
アンサンブルの構成の検討, 選曲 ・ クラスの人員の特長を生かし、能力や音楽性を高め合える曲を選ぶ。 ・ アンサンブル内の役割, 担当楽器を決定する。	2	<特別活動（ホームルーム活動）> (1) ホームルームや学校の生活づくり <特別活動（ホームルーム活動）> (2) 適応と成長及び健康安全 オ コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立 <特別活動（学校行事）> (2) 文化的行事
創意工夫 ・ 旋律や伴奏を正しく演奏できるようにする。 ・ 違うパートやセクションと合わせながら表現意図をもって演奏できるように工夫する。	4	
発表（コンサート） ・ 思いや意図を生かした演奏に仕上げ、互いに発表し合う。	1	

更なる充実のために—他教科における学習と関連付けた指導—

本題材を通してキャリア教育を更に充実させるためには、選曲や音楽活動を進めるに当たり、楽曲の歴史的背景を踏まえるなど地理歴史科の学習内容と関連性をもたせること、創意工夫を伝え合う際には国語科での学習を役立たせることなどが考えられます。

《本時のねらい》

- ・ 楽曲の内容や曲想を味わい、ふさわしい表現を工夫して演奏できるようになる。
- ・ パートの役割と合奏全体の関わりを理解して、表現を工夫しながら演奏する。

《展開》（4／7時間）

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項と評価
導入	1 基礎練習をする。 2 前時までの学習内容の確認 （アンサンブル内で）	○：配慮事項 ◎：キャリア教育の視点から見て特に重要なこと ☆：評価 ○ 奏法が正しく身に付いているか確認する。 ○ 前時までの内容が身に付いているか確認する。 ◎ アンサンブルのリーダーに各パートの表現をチェックさせながら、これまでの成果や課題などを互いに確認させる。
展開	3 演奏を録音し、客観的に演奏を判断する。 ・ 表現を工夫したい場所を明確にするとともに、音楽のそれぞれの要素を項目ごとにチェックする。 ・ 音楽全体の印象について話し合い、次の練習への意欲を高める。 4 反復練習 ・ 様々なパートによる演奏の組合せの工夫、全体での合奏などを繰り返し行い、課題を克服する。 ・ より高度な表現方法について意見交換を行う。	◎ 工夫したいところについて、理由を含めながら発言させる。 ◎ 互いの意見を尊重し、より良い演奏方法を考えさせる。 ○ 各パートの改善が必要な部分について、その具体的方法を伝え合えるよう支援を行う。 ○ 演奏の変化に応じた助言を行う。
まとめ	5 振り返りカードの記入 ・ 本時の練習の成果が分かるよう、到達度をチェックする。 ・ 次時の練習内容を明確に表し、練習目標を設定する。	☆ 自己評価：個人や全体の音楽表現に対する工夫、成果、改善点などを書く。 ◎ 個人やアンサンブル全体の課題を発見し、互いにアドバイスをし合い、次時の目標を設定させる。

《実践のポイント》

生徒同士が、互いの演奏を高め合うために音楽を通してコミュニケーションを行うことによって、それぞれの役割を明確にするだけでなく、肯定的な自己理解や自己有用感を味わわせることができます。また、演奏以外の面においてもパートリーダーなどアンサンブル内の役割を設定することにより、人間関係を形成する力が身に付くでしょう。

3-2 実践例 《美術・第1学年》 社会の印象をデザインで表現する

世の中へ向けたメッセージ—諸問題をポスターで表現しよう—

■ ねらい

社会の諸問題（ニュースや記事）について考えたことや想像したことから生み出した主題を基に、表現形式の特性などから構想を練り、創意工夫して表現するとともに、他者の作品を批評し合うなどして、作者の心情や意図、創造的な表現の工夫などを感じ取る。

■ 本実践とキャリア教育

社会の諸問題について考えることは、これに参画している一員としての自覚を促すことにつながります。さらに、メッセージ性の強い作品を生み出す上で、自らの意見を他者に対して表明する主体的な行動力を養うことも期待できます。

また、お互いの作品を鑑賞する場面では、感性や想像力を働かせて、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、それらを発表し合うことで、自分の言動が他者に与える影響について理解することや、双方の個性を尊重するなどの効果が期待されます。

《全体構想》

主な学習活動	時数	
1 課題の把握と発想・構想 <ul style="list-style-type: none"> ポスターの効果を理解し、題材への関心を高める。 社会の諸問題を把握し、表現する主題を生み出す。 主題を基に構想を練る。 	2	<公民科> 「現代社会」や「政治・経済」の全般的内容 <国語・現代文B> メディアとしての文字、音声、画像などの特色をとらえて、表現の仕方を考える
2 制作 <ul style="list-style-type: none"> 構想を基に自分の表現意図に合う表現方法を工夫する。 構図や配色など、具体的な構想を練り上げる。 インパクトのあるキャッチコピーを考える。 	5	
3 鑑賞（プレゼンテーション） <ul style="list-style-type: none"> 他者の作品から、作者の主題、表現意図と表現の工夫などを感じ取る。 批評の結果を基に、自らの作品に改善点を反映させる。 	2	

更なる充実のために—他教科における学習と関連付けた指導—

本題材を通してキャリア教育を更に充実させるためには、構想を練るに当たり、公民科だけではなく、地理歴史科や家庭科、保健体育科の学習内容と関連性をもたせること、批評する際には国語科の「国語総合」における「話すこと・聞くこと」での学習を役立たせることなどが考えられます。

《本時のねらい》

- ・ 社会の諸問題を考察し、表現する主題を生み出す。
- ・ 主題を導くために、適切な資料の選択を行う。

《展開》（1／9時間）

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項と評価
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポスターそのものがもつ効果、性質について知る。 ・ 必要な資料を収集する。 ・ 資料を参考にしながら、社会の諸問題を考察し、表現する主題を生み出す。 ・ 社会の諸問題を解決するための手立て、アピールすべきポイントなどから発想し、表現したい主題を検討する。 ・ 完成させるためのプランニングを行う。 	<p>○：配慮事項 ◎：キャリア教育の視点から見て特に重要なこと ☆：評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な資料を活用し、取り扱う主題についてイメージを広げさせる。 ◎ 社会の諸問題について広く考え、課題を発見し、解決するための方法について助言を行う。 ◎ プランニングに当たり、主に時間配分などのチェックを行う。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主題を基にアイデアスケッチなどにより構想をまとめる。 ・ より個性的なものを含められるよう、独自のアイデアを検討する。 ・ 必要な配色、構図、キャッチコピーの内容について、素案を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アイデアスケッチの中から、より自分の理想に近いものを明確にさせていく。 ○ 完成形に近付けるための素案を構想させる。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループごとに、お互いのアイデアスケッチを鑑賞する。必要に応じて、お互いアドバイスをする。 ・ 本時の学習を振り返る。 ・ ワークシートに本時の達成度、次時の課題や目標などをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ お互いのアイデアスケッチを鑑賞することによって、他者の個性や考え方を尊重させるよう促す。 ◎ 改善点について意見交換させる。 ○ 鑑賞の視点やポイントを知らせる。 ☆ 表現したい主題を生み出すことができたか。

《実践のポイント》

生徒同士が、互いの作品を高め合うために美術を通してコミュニケーションを行うことによって、他者の個性を理解する力や、コミュニケーション・スキルを身に付けることができるでしょう。また、作品を制作するに当たり、課題発見、計画立案などの要素を授業の中にも含むことも、キャリア教育の視点上、重要なこととして位置付けられます。

1 外国語科を通じたキャリア教育実践についての基本的な考え方

(1) 外国語科の学習で身に付ける力

外国語科の学習の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」ことです。聞いたり、読んだりしたことを踏まえた上で、コミュニケーションの中で情報や考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるようになることを目指し、「聞くこと」や「読むこと」と、「話すこと」や「書くこと」とを結び付け、四つの領域の言語活動の統合を図ることが求められます。『高等学校学習指導要領解説 外国語編』では、外国語科の目標について以下のように解説しています。

高等学校学習指導要領解説 外国語編 <<抜粋>>

外国語科の目標は、コミュニケーション能力を養うことであり、次の三つの柱から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- ③ 外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと。

(中略) この③に係る能力は、「コミュニケーション能力」の中核をなすものであり、①に示す言語や文化に対する理解や②に示す積極的な態度と不可分に結び付いている。すなわち、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」ためには、「言語や文化に対する理解」や「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を有することが必要であり、また、「言語や文化に対する理解」の深まりや「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の向上によって、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」ことが一層効果的に行えるようになるということである。

このように、これら三つの柱が相互に作用しながらコミュニケーション能力の育成を図っていくことが目指されているのです。

(2) キャリア教育の視点から見る外国語科

キャリア教育は、社会的・職業的な自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育て、キャリア発達を促すことを目指す教育活動です。こうした教育活動の中で、生徒たちが基礎的な知識・技能を習得し、これらを活用して、自ら課題を解決するために思考し、判断し、表現することは、すべて言語を通して行われるものです。

その意味において、正に言語に関する技能そのものの習得を目的とする外国語科は、生徒たちのキャリア発達に不可欠な能力や態度を育成する重要な役割を担っている教科です。特に、基礎的・汎用的能力の一つである人間関係・社会形成能力の重要な要素であるコミュニケーション能力の育成において、外国語科における学習が果たす役割の大きいことは明らかです。学習指導要領総則にもあるように「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること」が、外国語科の授業実践に、今、強く求められています。

外国語科の学習は、言語とその文化的な背景を学ぶことにより、自分を取り巻く社会や世界に目を向け、他者に対して積極的に関心を持ち交流していく意欲や能力を育むとともに、自分が住む社会や世界で自分自身をより良く生かしていくことができるよう、必要な情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を育成するものでもあります。そして、これらのことが、キャリア教育が目指す社会的・職業的自立の基盤となる能力・態度であることは言うまでもありません。

2 高等学校における外国語科の指導内容とキャリア教育 －「基礎的・汎用的能力を視点として」－

外国語科では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」ことを目指しています。また、高等教育機関で学んだり社会に出て働いたりする際に必要となる外国語の能力の基盤を育成する役割を担っている点からも、生徒たちのキャリアに深く関わるものと言えます。さらに、外国語科で行われる様々な言語活動を以下のように「基礎的・汎用的能力」の視点で捉えると、いずれの活動も社会的・職業的自立の基盤となる能力・態度の育成につながるものがより明確になり、キャリア教育において重要な役割を果たす教科であることがわかります。

「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する外国語科の言語活動の例

能力学年	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力	キャリア プランニング能力
入学 第一学年	「読むこと」 ・ 読んで理解した内容を聞き手に伝わるように、その反応を確かめながら音読する。	「話すこと」 ・ 相手に伝わるように表現しようとするのが、自分の考えを整理したり深めたりすることに役立つということに気付く。	「聞くこと」 ・ 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報と考え、事実と意見などを区別し整理しながら概要や要点を捉える。	「書くこと」 ・ 聞いたり読んだりしたことなどの概要や要点を書く際、平易な表現に置き換えたり、情報の順序を変えたりするなどして、読み手にわかりやすく表現する。
第二学年 第三学年 卒業	「話すこと」 ・ 情報や考えなどについて、ペアやグループで話し合うなどして結論を導いたり、論理的な話し合いを通じて、合意できることやできないことについて共通の認識を得る。	「読むこと」 ・ 何のために読むのかをあらかじめ明らかにし、目的に応じた読み方を選択する。	「書くこと」 ・ まとまりのある文章を書く際に、論理の一貫性、段落のつながりなどに注意するとともに、誰を対象にして書くのか、何のために書くのかなどの書く目的を明確に設定する。	「聞くこと」 ・ キーワードやトピック・センテンスを的確に把握して内容の展開を理解するとともに、その後の展開を予想して聞く。
上記の各活動をさらに発展させ、社会生活において活用できるようにする。				

「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能全てが、コミュニケーション能力の育成に深く関わるものです。そのことを前提とし、4技能の育成が「基礎的・汎用的能力」とも様々な面で関わりをもつものであることを意識し、授業での言語活動を充実させていくことが重要です。

専門教科「英語科」における取組

- 英語を通じて、コミュニケーション能力を養うことを目指すこの教科は、「基礎的・汎用的能力」の育成と深く関わります。英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができるよう、4技能を総合的に育成するための統合的な指導を行い、生徒のコミュニケーション能力をさらに伸ばしていくことが大切です。

3 実践例 《英語 I ・ 第 1 学年》 自分自身の生き方を考える。

Anne and Audrey

■ ねらい


本単元は、アン(ネ)・フランクとオードリー・ヘップバーンを取り上げ、同じ年に生まれ、同じ戦争を経験した二人が、様々な経験をどのように受け止めて生きようとしたかを知り、自分のこれからの生き方について考える機会を与える教材となっている。

アンの存在がオードリーにどのような影響を与え、それが、その後の彼女の生き方をどう変えることになったかを読み取らせ、グループで話し合う。また、読んで理解したことを改めて深く考えるために、オードリーの活動の概要をまとめ、彼女の生き方についての感想を英語で発表させる。

■ 本実践とキャリア教育

ハリウッド女優として成功を取めたオードリーが、アンの影響を受けてどのような人生を送ったかを知り、自身のこれからの生き方を考えます。キャリアプランニングに関わる能力の育成とともに、言語活動を通して人間関係形成・社会形成能力や自己理解・自己管理能力などの育成につなげていきます。(Provision English Course I 桐原書店 より)

全体構想

主な学習活動	時数	
○ 第二次世界大戦中にオードリーがオランダで暮らしていた時の様子を読み取る。地図と年表の入ったワークシートに、その歩みを記入する。	1	 <p><総合的な学習の時間> 自己の在り方生き方や進路についての学習</p> <p><特別活動(ホームルーム活動)> (3) 学業と進路主体的な進路の選択決定と将来設計</p>
○ 同時期にオランダで暮らしていたアンの歩みを読み取り、上記のワークシートを完成する。二人の共通点と相違点について、ワークシートを基にグループで発表し合いながら理解を深める。	1	
○ 戦後『アンネの日記』を読んだ時のオードリーの気持ちと、後年、ユニセフ親善大使として働いた時の彼女の気持ちを読み取り、心情の変化についてグループで話し合う。	1	
○ ユニセフの慈善コンサートで『アンネの日記』を朗読した時のオードリーの気持ちと、アンが抱き続けていた思いを読み取り、日記の一節を感情を込めて音読する。	1	
○ オードリーの活動について、セクションごとに概要や要点を英文でまとめるとともに、彼女の生き方についての感想をグループ内で伝え合う。	1	

更なる充実のためにー他教科における学習と関連付けた指導ー

第二次世界大戦前後を中心としたヨーロッパの政治的情勢や地理的な背景などに目を向けさせることにより、地理歴史科の学習と関わり、広く世界に関心を持てるようにする。

《本時のねらい》

- ・ 読んだ英文の概要や要点を書いてまとめるとともに、英文の内容に対する感想を英語で表現することができる。
- ・ 平易な語彙や既習の文構造を用いて情報をまとめ、聞き手が理解しやすいように表現することができる。
- ・ 本単元の登場人物の生涯について理解することで、自らの生き方についても考えることができる。

《展開》（5 / 5時間）

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項と評価 ○：配慮事項 ◎：キャリア教育の視点から見て特に重要なこと ☆：評価
導入	1 教科書を閉じたまま本単元をセクションごとに聞き、ワークシート上のオードリーの活動に関する質問についてメモを取る。 2 グループになり、質問とメモを利用して、各セクションに書かれているオードリーの主な活動を口頭で説明する。	○ 聞き取るべき事項を精選してワークシート上に明示しておき、生徒が各事項についてメモを取ることができる構成にする。 ○ グループ内で各生徒が担当するセクションを決め、全員が活動に関わるようにする。 ☆ ワークシートを見ながら、必要な情報を口頭で説明することができている。
展開	3 本単元を読み直し、オードリーの活動に関する細部情報をワークシートに整理する。 4 3で整理したことに基づいて、自分が担当するセクションについて、オードリーの活動を中心に概要や要点を英文でまとめる。 5 オードリーの生き方についての感想を、英文で書く。 6 上記4及び5で作成した概要と感想をペアで交換し、わかりづらい表現等を指摘し合う。 7 指摘されたことに基づいて、英文を修正する。	○ 導入で聞き取った事柄について、更に必要な細部情報を拾い出させる。 ○ 拾い出した情報を文章化する際、伝える情報の順序を変えたり、既習の表現を用いて書き換えるなどして、読み手が理解しやすい内容にするよう工夫させる。 ○ 感想のモデル文を事前に示し、生徒が活動のゴールを明確に理解できるようにする。 ◎ 自分の生き方と照らしあわせて感想を書く。 ○ 意味が伝わらないようなグローバル・エラーについては教師が取り上げ、クラス全体に説明する。 ◎ 他者に何かを伝えようとするときに心掛けるべきことを意識する。
まとめ	8 グループ内で自分が担当するセクションの概要とそれに対する感想を発表し合う。	○ 〈原稿を確認→聞き手を見て発話〉の“Read and Look Up”の手法で発表するよう指導する。 ☆ 教材の内容や自分の感想を適切に表現し、聞き手に伝えることができている。

《実践のポイント》

- ・ 外国語を通じて、互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力やコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことを目指しているため、生徒たちがこれらの活動に生き生きと取り組めるよう、温かな雰囲気での授業を進めることを心掛けましょう。

1 家庭科を通じたキャリア教育実践についての基本的な考え方

(1) 家庭科の学習で目指すこと

家庭科は、教科の目標に「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ」とあるように、人の一生を時間軸として、人間が生まれてから死ぬまでの間、各ステージの課題を達成しつつ発達するという生涯発達の考えを重視しています。また、自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度を育成することを目指しています。指導に当たっては、生活の営みに必要な金銭、生活時間、人間関係などの生活資源や、衣食住、保育、消費などの生活活動を空間軸として捉えて、各ステージの課題と関連付けて理解させることが重要です。

また、生活に必要な知識と技術の習得を通して、共に支え合う社会の一員として主体的に行動する意思決定能力を身に付け、男女が協力して家庭や地域の生活を創造することができるようにすることについても重視しています。

以上のように、家庭科の目指していることは、「生きる力」を育むとともに、キャリア教育を実践する上でも密接に関わり、生涯にわたるキャリア発達を促すことと深くつながります。

以下は、『高等学校学習指導要領解説 家庭編』（平成22年5月）に示された教科の目標及び共通科目「家庭」の目標を解説から引用したものです。

高等学校学習指導要領解説 家庭編 《抜粋》

- 共通教科「家庭」の目標 人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。
- 科目「家庭基礎」の目標 人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。
- 科目「家庭総合」の目標 人の一生と家族・家庭、子どもや高齢者とのかかわりと福祉、消費生活、衣食住などに関する知識と技術を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。
- 科目「生活デザイン」の目標 人の一生と家族・家庭及び福祉、消費生活、衣食住などに関する知識と技術を体験的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。

(2) 家庭科教育の実践とキャリア教育

「人の一生」について生涯発達の視点から学習することは、家庭科ならではのものです。

家庭科でねらう力とキャリア教育で付けたい力は密接なつながりがあることを意識して、家庭科教育全体を通してキャリア教育を継続的に実践することが重要です。

家庭科で育む力としては次の点があげられます。

- ① ライフプランを展望する力、生涯を見通して生活を考える力や生活の実践力を身に付ける。生活理論と実験・実習を通して生活の実践力を付ける。
- ② 問題解決能力、意思決定能力を付ける。「何が問題か」「自分はどうするのか」「社会の一員としてどのように行動したらよいのか」を考える。
- ③ 対人能力、思考力・判断力・表現力を育む言語活動を重視する。

2 高等学校における家庭科の指導内容とキャリア教育 －「基礎的・汎用的能力を視点として」－

家庭科の共通教科、専門教科が目指すことは、キャリア教育が目指すことと重なり、ねらう力は「基礎的・汎用的能力」に対応しています。家庭科では「人の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ」、生涯発達の視点から自立した社会の一員として、「生きる力」を身に付けていくことを重視しています。共通教科「家庭」、専門教科「家庭」のいずれにおいても、キャリア教育の目指す「基礎的・汎用的能力」である「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を育成していることを意識することが大切です。

「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する家庭科の指導内容の例

分野／能力	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力	キャリア プランニング能力
共通教科 「家庭」 『家庭基礎』 『家庭総合』 『生活デザイン』 の共通分野	<ul style="list-style-type: none"> 生涯発達の視点で人の一生と青年期の自立、家族・家庭について考える。 子どもの発達、親の役割と保育、地域社会の果たす役割を理解する。 高齢期の生活を理解し、高齢者の自立生活を支える家族や社会の役割を考える。 共に支え合って生きていることを認識し、家庭や地域及び社会の一員として主体的に行動することの意義について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 消費生活の現状と消費者問題や消費者の権利と責任を理解し、生涯を見通した経済計画について考える。 ライフステージごとの衣食住の生活を科学的に理解し、持続可能な社会を目指して安全と環境に配慮して、主体的に衣食住を営むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームプロジェクトと学校家庭クラブにおいて、生活上の課題を設定し、解決方法を考え、実践することを通して、生活を科学的に探究する方法や問題解決の能力を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 持続可能な社会を目指したライフスタイルを確立して主体的に行動できるようにする。 生活設計を立て、生涯を見通した主体的な生活ができるようにする。

指導計画の作成に当たっては、共通教科「家庭」の「家庭基礎」、「家庭総合」、「生活デザイン」の科目の特徴を理解することが大切です。3科目ともに、総授業時数の10分の5以上を実験・実習に配当することとしており、「基礎的・汎用的能力」を育成する上でも重要です。

専門教科「家庭」における取組

専門教科「家庭」では、産業教育における将来のスペシャリストに必要な資質や能力を育成することを重視しています。教科の目標は「家庭の生活にかかわる産業に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、生活産業の社会的な意義や役割を理解させるとともに、生活産業を取り巻く諸課題を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって解決し、生活の質の向上と社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる」であり、「基礎的・汎用的能力」を育成することと密接に関係しています。

3 実践例

家庭総合（4）生活の科学と環境 エ 持続可能な社会を目指したライフスタイルの確立

持続可能な社会を目指したライフスタイルを考えよう

■ ねらい

安全で安心な生活と消費について考え、生活文化を伝承・創造し、資源や環境に配慮した生活が営めるような持続可能な社会を目指して、ライフスタイルを主体的に考えることができるようにします。

■ 本実践とキャリア教育

持続可能な社会を目指してライフスタイルを考えることは、生徒のキャリア発達を促し、キャリア教育における「キャリアプランニング能力」を育成することになります。また、安心・安全な生活と消費、生活文化の伝承・創造や持続可能な社会を目指し考えることで、キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」の「自己理解・自己管理能力」や「人間関係形成能力・社会形成能力」、「課題対応能力」を身に付けることが期待できます。

《全体構想》

主な学習活動	時数	
自分の生活を見つめる【以前の振り返りを含む】 振り返り（自立度と意識チェック、ライフステージごとの食生活、衣生活、住生活、消費生活と意思決定） <ul style="list-style-type: none"> ・ ありたい自分について考える ・ 卒業までに身に付けたい能力について考える ・ 自律した生活について考えるため、1日の生活時間を設計する 	3	《公民科・現代社会》 (2) 現代社会と人としての在り方生き方 《理科・科学と人間生活》 (2) 人間生活の中の科学 《公民科・現代社会》 (3) 共に生きる社会を目指して
生活文化と暮らし <ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な生活文化と生活文化の意義を理解する ・ 風土、民族と生活文化との関わりを考える 	1	
持続可能な社会を目指して <ul style="list-style-type: none"> ・ 地球が直面している環境問題を認識する ・ 持続可能な社会の実現に必要なことを考える ・ 生活の中でできる持続可能な社会への手掛かりを発表する ・ 持続可能な社会を目指してクラス、学校でできることをグループで話し合っ発表し、クラスで実行できることを決定する 	3	
持続可能な社会を目指したライフスタイル <ul style="list-style-type: none"> ・ 持続可能な社会を目指した自分のライフスタイルを考える 卒業後1年目の19歳の私、卒業後10年目の28歳の私	3	

更なる充実のために—他教科における学習と関連付けた指導—

持続可能な社会を目指したライフスタイルを形成するためには、公民科の「現代社会」、理科の「科学と人間生活」、地理歴史科の「日本史B」、保健体育科、芸術科等の学習と関連付けることが考えられます。このような工夫により、社会の中で生き、社会をつくる一人であるという意識が深まります。

《本時のねらい》

各自の生活と持続可能な社会の実現に必要なことを振り返りながら、持続可能な社会を目指した「19歳の私」のライフスタイルを考える。

《展 開》(8 / 10 時間)

過 程	学習活動と内容	指導上の配慮事項と評価
導 入	1 今までの学習を確認する ・ 自分の生活を見つめ、卒業までに身に付けたい自分の生活をつくる能力、ありたい自分、1日の生活時間の分類を確認する。 ・ 自律した生活を送るための生活時間の設計をする。 ・ 地球が直面している課題をキーワードでまとめる。	○：配慮事項 ◎：キャリア教育の視点から見て特に重要なこと ☆：評価 ○ 各自で振り返る内容を明確にする。 ○ 持続可能な社会の必要性と、実現に必要な内容を確認し、発表させる。
展 開	2 持続可能な社会を目指したライフスタイルを考える ・ 高校卒業1年目である19歳の私のライフスタイルについて考える。 ・ 持続可能な社会実現に向けて、生活の中で実行できることを衣生活、食生活、住生活、消費行動などから具体的に考える。	◎ キャリア発達の視点からキャリアプランニングすることに気付かせる。 ◎ 人々との関係や社会の関わり、社会の構成員の一人としての自分に気付かせる。 ○ 生活の中で継続的に実行できる具体的な行動内容を考えさせる。 ☆ 持続可能な社会の実現に向けて、生活の中で実行できる具体的な内容が考えられたか。 ☆ 19歳のライフスタイルが考えられたか。
まとめ	3 19歳の自分のライフスタイルを見直し、それに向けて今からできることを確認し、具体的に実行していくことをまとめる。	◎ 人はキャリア発達し続けることを確認し、今できることを実行していく大切さを示す。 ☆ 実行することについて効果的にまとめることができたか。

《実践のポイント》

- ・ 持続可能な社会を目指す方法を考えさせることが、キャリア教育になります。
- ・ 持続可能な社会を目指す方法を生活と関連付けて具体的に考えることで、人は社会の一員であり、一人一人が社会をつくる一人であることについて認識することができます。
- ・ 自分の生活を衣生活、食生活、住生活や消費行動などの視点から見直し、課題を見付け、その解決を自分のライフサイクルや社会が目指すことと関連付けて考えることが、キャリア教育になります。
- ・ 自分の生活を見直し、身に付けたい能力を考え、ライフサイクルを考えることは、今後の働く場面での課題への対応やキャリア発達につながります。また、自分のライフサイクルと社会の変化とを関連させて考えることは、個人と地域、社会とのよりよい関わりを考えさせる上で大切なことです。
- ・ 生涯全体を見通したライフサイクルを考えることが大切です。

1 情報を通じたキャリア教育実践についての基本的な考え方

教科情報では、情報及び情報技術を活用するための知識と技能を習得させ、情報に関する科学的な見方や考え方を養うとともに、社会の中で情報及び情報技術が果たしている役割や影響を理解させ、社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てることを目標としています。

高度に進化した情報社会においては、人間が生きていくための必須条件として「衣食住」に「情報」が加わると言っても過言ではありません。多様化する情報源、短時間に大量に創造され、流通している情報、そして誰もが情報の発信者になれる時代を適切に生き抜くために必要な情報活用能力は、社会人として、そして職業人として欠かすことはできません。また、技術革新に伴う新たな価値観、マナー、モラルを身に付ける情報モラルの教育も、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力などを育成するキャリア教育の一環と位置付けられます。

(1) 社会と情報

情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てることを目標としています。

(2) 情報通信ネットワークとコミュニケーション

ウ 情報通信ネットワークの活用とコミュニケーション

情報通信ネットワークの特性を踏まえ、効果的なコミュニケーションの方法を習得させるとともに、情報の受信及び発信時に配慮すべき事項を理解させる。

(3) 情報社会の課題と情報モラル

ウ 情報社会における法と個人の責任

多くの情報が公開され流通している現状を認識させるとともに、情報を保護することの必要性和そのための法規及び個人の責任を理解させる。

(4) 望ましい情報社会の構築

ウ 情報社会における問題の解決

情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して問題を解決する方法を習得させる。

(2) 情報の科学

情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させるとともに、情報と情報技術を問題の発見と解決に効果的に活用するための科学的な考え方を習得させ、情報社会の発展に主体的に寄与する能力と態度を育てることを目標としています。

(2) 問題解決とコンピュータの活用

ア 問題解決の基本的な考え方

問題の発見、明確化、分析及び解決の方法を習得させ、問題解決の目的や状況に応じてこれらの方法を適切に選択することの重要性を考えさせる。

(3) 情報の管理と問題解決

ウ 問題解決の評価と改善

問題解決の過程と結果について評価し、改善することの意義や重要性を理解させる。

(4) 情報技術の進展と情報モラル

ウ 情報社会の発展と情報技術

情報技術の進展が社会に果たす役割と及ぼす影響を理解させ、情報技術を社会の発展に役立てようとする態度を育成する。

2 高等学校における情報科の指導内容とキャリア教育 —「基礎的・汎用的能力」を視点として—

教科「情報」では、情報機器や情報通信ネットワークを通して社会と関わりを持ち、社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力や態度を、バランスのとれた座学と実習を通して身に付けます。コミュニケーションを効果的に行う方法、適切な情報の収集と選択、問題解決の方法など、高校生である現在から生涯にわたって役立つ能力・態度であることを、実践的な課題で生徒に実感させながら学ばせる工夫が必要です。

「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する情報の指導内容の例

科目／能力	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力	キャリア プランニング能力
社会と情報	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション手段の発達をその変遷と関連付けて理解させるとともに、通信サービスの特徴をコミュニケーションの形態との関わりで理解させる。 情報通信ネットワークの特性を踏まえ、効果的なコミュニケーションの方法を習得させるとともに、情報の受信及び発信時に配慮すべき事項を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの情報が公開され流通している現状を認識させるとともに、情報を保護することの必要性とそのための法規及び個人の責任を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して問題を解決する方法を習得させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報を分かりやすく表現し効率的に伝達するために、情報機器や素材を適切に選択し利用する方法を習得させる。 情報化が社会に及ぼす影響を理解させるとともに、望ましい情報社会の在り方と情報技術を適切に活用することの必要性を理解させる。
情報の科学	<ul style="list-style-type: none"> 社会の情報化が人間に果たす役割と及ぼす影響について理解させ、情報社会を構築する上での人間の役割を考えさせる 	<ul style="list-style-type: none"> 情報社会の安全とそれを支える情報技術の活用を理解させ、情報社会の安全性を高めるために個人が果たす役割と責任を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題の発見、明確化、分析及び解決の方法を習得させ、問題解決の目的や状況に応じてこれらの方法を適切に選択することの重要性を考えさせる。 問題解決における情報通信ネットワークの活用方法を習得させ、情報を共有することの有用性を理解させる。 問題解決の過程と結果について評価し、改善することの意義や重要性を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報システムとサービスについて、情報の流れや処理の仕組みと関連付けながら理解させ、それらの利用の在り方や社会生活に果たす役割と及ぼす影響を考えさせる。

専門教科「情報」における取組

情報の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、現代社会における情報の意義や役割を理解させるとともに、情報社会の諸課題を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって解決し、情報産業と社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てることが目標です。専門的かつ最先端の内容を取り扱いながらも、普遍的に教育すべき内容を確実に押さえることが必要です。

3 実践例 《第1学年 社会と情報》

「高校生に携帯電話は必要である」を題材にしたディベート

■ ねらい


情報化が社会に及ぼす影響を理解させるとともに、望ましい情報社会の在り方と情報技術を適切に活用することの必要性を理解させる。その際、生徒が主体的に考え、討議し、発表し合う活動を取り入れる。

■ 本実践とキャリア教育

「社会と情報」の内容の(3)「情報社会の課題と情報モラル」では、情報化の光と影の両面から物事を捉えさせ、その上で情報技術の適切な活用法や、望ましい情報化社会の在り方を考えさせる必要があります。本実践では「物事を両面から考えさせる」手段としてディベートを採用し、論題には生徒にとって最も身近な携帯電話を所有することの是非を採用しました。授業の導入部では、すべての生徒に「肯定側」、「否定側」双方の立場に立って、携帯電話について考えさせます。論拠資料の作成過程では様々な資料を調べることで、携帯電話の利点と共に、活用上のトラブルやネット犯罪などを知るようになります。

この学習活動はキャリアプランニング能力の「必要な情報収集と活用」、「選択決定」、「多様性の理解」の他、基礎能力の「論理的な思考力、創造力」にもつながります。小グループでの意見集約や準備、ディベート実践では、人間関係形成・社会形成能力の「コミュニケーション能力」、「他者への働きかけ」、「リーダーシップ」、「チームワーク」が期待できます。情報活用能力のまとめや情報モラル教育として、総合的な実践としても活用できる実践例です。

《全体構想》

主な学習活動	時数	
論題の理解と論拠資料の作成 <ul style="list-style-type: none"> ・ 論題を肯定・否定両方の立場から考える。 ・ インターネットや新聞、雑誌、書籍などから、自分の意見を裏付ける情報を収集し、分かりやすく表現し効率的に伝達するための論拠資料を作成する。 	2	 <p>＜総合的な学習の時間＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 探究活動の過程における言語による分析や、まとめたり発表したりする学習活動 <p>＜特別活動（ホームルーム活動）＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グループでの話し合い活動
小グループにおける意見集約 <ul style="list-style-type: none"> ・ クラスの生徒を半数ずつ肯定側、否定側に分け、それぞれで3～4人程度の小グループをつくって意見を集約する。 	1	
ディベートの役割分担と準備 <ul style="list-style-type: none"> ・ クラスで司会、時計、論者などの役割分担をし、ディベートの準備をする。 	1	
ディベート実践 <ul style="list-style-type: none"> ・ シナリオに従い、ディベートを行う。 	1	
全体発表、まとめ <ul style="list-style-type: none"> ・ 学年全体で集まり、クラスごとの結果を発表する。最後に、教師が講評する。 	1	

更なる充実のために—他教科における学習と関連付けた指導—

情報社会を考える前に、「現代社会」で現代の社会を多様な角度から理解させ、人間としての在り方生き方を事前に学んでおくことで、より深い考察や高度な意見交換が可能になります。また、国語科の「国語総合」における「話すこと・聞くこと」、「書くこと」や数学科の「数学Ⅰ」における「データの分析」の活用場ともなりますので、予めこれらの教科の担当教員にディベート実施の旨を伝え、それを意識した授業展開をお願いしておく、更に効果的です。

《本時のねらい》

- ・ 物事を両面から考え、多様なものの見方や、他者を理解する心を身に付ける。
- ・ 適切な情報の収集と選択、活用を通して、自論を裏付ける論拠資料を作成する。

《展開》（1～2／6時間）

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項と評価
導入	1 前時間に学んだディベートについて思い出す。 2 本時の流れの説明を聞く。	○：配慮事項 ◎：キャリア教育の視点から見て特に重要なこと ☆：評価 ○ 前の時間に詳しく説明したディベートについて理解しているか、確認する。 ○ 6時間の全体の流れとともに、本時の活動を説明する。
展開	3 論題について、肯定側、否定側双方の立場から、その理由や根拠を考える。 4 自説を裏付ける論拠資料を作成する。 ・ インターネットを活用して情報収集を行う。 ・ 図書室等を活用して情報収集を行う。 ・ 集めた情報をまとめ、グラフや表などの客観的なデータを取り入れた論拠資料を、ICTを活用して作成する。	☆ 論題を正しく理解し、肯定、否定の双方の立場から物事を捉え、その理由や根拠を示している。 ◎ 一方の立場の有利な点が他方の立場の不利な点になることに気付かせる。 ◎ 必要な情報を、インターネットや新聞、書籍等を適切に活用し、収集する。 ○ 情報の信頼性、信憑性 ^{びよう} に配慮する。 ○ 著作権などの知的財産に十分に配慮し、特に出典や引用元を必ず控えさせる。 ◎ 情報の客観性、公平性などを見極め、必要な情報を選択し、活用する。 ☆ 情報を分かりやすく表現した論拠資料を作成することができる。
まとめ	5 作成した資料をプリントアウトする。 6 次回以降の授業の流れを確認する。	☆ 相互評価やグループでの話し合いを通して自分の考えを深めている。

《実践のポイント》

- ・ 論題は情報社会ならではの課題とすることで、より身近な問題として捉えさせることができます。社会の情報化という側面を通して、社会の一員としてどう在るべきか、どう参画するべきかを考えさせることが、キャリア教育につながっていきます。
- ・ 初めに小グループで意見を集約させることで、少数派の意見に耳を傾けたり、その意見を吸い上げて全体に知らせたりすることができます。
- ・ 肯定側と否定側は、生徒個人の意見に関係なく機械的に二分しましょう。そうすることで、自分とは異なる立場でものを考えることができるようになります。

1 「農業」を通じたキャリア教育実践についての基本的な考え方

(1) 農業科における教育活動とキャリア教育

新高等学校学習指導要領における教科「農業」の目標は、意欲的な学習を通して、農業に関する知識や技術の定着を図り、将来のスペシャリストの育成に必要な専門分野の基礎・基本を身に付けさせる観点などから、①「農業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させる」、②「農業の社会的な意義や役割について理解させる」、③「農業に関する諸課題を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって解決し、持続的かつ安定的な農業と社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる」の3点で構成しています。この中で特に②と③は「学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする」（総則第5款教育課程の編成、実施に当たって配慮すべき事項4（3））と関連が深く、農業科の学習を通してキャリア教育を実践する上でのポイントとなります。

(2) 農業の実践を通じた「基礎的・汎用的能力」の育成

農業の各分野に共通する内容を持つ科目としては、「農業と環境」「課題研究」「総合実習」「農業情報処理」があります。原則履修科目である「農業と環境」「課題研究」を中心に様々な農業教育が展開される中で、動植物の形態とその育成方法を知り、環境を知り、地域とその特性を知り、交流を深める中で、「人間関係形成・社会形成能力」や「自己理解・自己管理能力」が育ちます。また、農産物を生産・加工し、それらをどのように地域で販売・サービスするかを考えることで「課題対応能力」が育ちます。さらには、校内外の農業に関する授業や実習、関連産業で就業体験をし、課題研究や総合実習、特別活動の時間で「農業情報処理」で学んだ情報機器を用いたまとめや発表をし、評価される中で社会的モラルを身に付け、最終的に「キャリアプランニング能力」が形成されるものと考えられます。

以下に、『高等学校学習指導要領解説 農業編』（平成22年10月）に示された4分野を示します。

高等学校指導要領 農業 4分野

① 主として農業の経営と食品産業に関する分野

農産物の生産、加工、流通、消費に関する科目。作物、野菜、果樹、草花、畜産、農業経営、農業機械、食品製造、食品化学、微生物利用、農業経済、食品流通の12科目から構成

② 主としてバイオテクノロジーに関する分野

植物と動物のバイオテクノロジーに関する科目。植物バイオテクノロジー、動物バイオテクノロジーの2科目から構成

③ 主として環境創造と素材生産に関連する分野

森林、林業、農業土木、造園に関する科目。森林科学、森林経営、林産物利用、農業土木設計、農業土木施工、水循環、造園計画、造園技術、環境緑化材料、測定の10科目から構成

④ 主としてヒューマンサービスに関連する分野

農業生産や地域資源の特性を活用した対人サービスに関する科目。生物活用、グリーンライフの2科目から構成

2 高等学校における農業科の指導内容とキャリア教育 —「基礎的・汎用的能力」を視点として—

高等学校農業科の3年間を通した指導内容には、前記の4分野がキャリア教育で育む基礎的・汎用的能力としての4能力に関連する項目が含まれています。この4能力を参考にしつつ、教科の特性を踏まえて具体的な取組を設定することが必要です。

「基礎的・汎用的能力」の育成に関連する農業科の指導事項

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
主として農業の経営と食品産業に関する分野	<ul style="list-style-type: none"> 農産物の生産・加工を通し、生産物が社会にどのように役立っているのかを知り、指導者や協力者の話をよく聴き、話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 農産物が生産・加工・流通・消費されることを通し、農産物の生育の難しさ、販売することの大変さ、大切さを身を持って体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> 農産物を生産するに当たり、自然災害や病虫害等を知り、協力して課題に対応する能力を培う。 	<ul style="list-style-type: none"> 協力して育てた農産物を生産・加工・流通・消費することを通して、自ら将来のスペシャリストとしてどうあるべきか考える。
主としてバイオテクノロジーに関連する分野	<ul style="list-style-type: none"> 動植物のバイオテクノロジーが社会にどのように役立っているのかを知り、指導者や協力者の話をよく聴き、話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 動植物のバイオテクノロジーに関する知識・技術を学ぶ中で、実験の難しさ、大切さを身を持って体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> 実験の難しさ、失敗を通して、協力して課題に対応する能力を培う。 	<ul style="list-style-type: none"> 動植物のバイオテクノロジーに関する基本的知識・技術を習得し、自ら将来のスペシャリストとしてどうあるべきか考える。
主として環境創造と素材生産に関する分野	<ul style="list-style-type: none"> 森林・林業・農業土木・造園が社会にどのように役立っているのかを知り、指導者や協力者の話をよく聴き、話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 環境・自然を素材とした内容に関する学習をする中で、素材を扱う難しさ、大切さを身を持って体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> 環境創造や素材生産の難しさ、自然災害や病害を知り、協力して課題に対応する能力を培う。 	<ul style="list-style-type: none"> 協力して育てた木や庭園材料を生産・加工・流通・消費することを通して、自ら将来のスペシャリストとしてどうあるべきか考える。
主としてヒューマンサービスに関連する分野	<ul style="list-style-type: none"> 園芸作物や社会動物、農山村の持つ特性が社会にどのように役立っているのかを知り、指導者や協力者の話をよく聴き、話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 園芸作物や社会動物、農山村の持つ特性をどのように活用するか、その難しさ、大切さを身を持って体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> 業学習の中で、学んだ知識・技術が社会的ヒューマンサービスとして伝えることの難しさを知り、協力して課題に対応する能力を培う。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会的農産物や農山村の特性を、それを知り得ぬ人々にどう伝え、実践していくか、自ら将来のスペシャリストとしてどうあるべきか考える。

かつて日本人の多くが従事していた産業「農業」は、輸出産業などに押され就業人口が減少、特に戦後「高度経済成長」の時代を迎え、その動きは加速、食料自給率がカロリーベースで40%にまで落ち込む国となりました。この時代背景とともに、利便性・利潤優先に重きが置かれ、知的基盤社会となった結果、我が国は「環境破壊」、「モラル意識の希薄化」、「地域教育力や家庭教育力の低下」、それに伴う「子どもたちの職業観・労働観・有用感の欠如」等といった社会現象を引き起こしています。しかし、「環境保全」、「地産地消」、「食育」、「食の安全・安心」が注目され、世界的な人口増加傾向などから農業を見直す時代が近付いています。そもそも日本の伝統文化、本来日本人が持つ勤勉さ、器用さ、連帯感、家族・地域への思いやりなど「日本人の良き気質」と言われた、いわゆるキャリア教育の原点は「農」にあったと言えます。このように考えれば農業教育は、^{もろもろ}諸々の産業・学問の原点と言えます。命を育み、自然環境と共存しながら地域とともに農産物を生産・加工し「食品」として提供することは、まさに「生命の大切さ」を学ぶ「農業教育」にふさわしいもので、高等学校の教科「農業」でキャリア教育の実践が可能となります。

3 実践例 《第3学年 課題研究分野》 地域と連携した農業体験交流

一般の方々に学校で農業体験を呼び掛けよう

■ ねらい

学校のホームページで呼び掛け、一般の農業体験希望の方々に高校の圃場^ほで生徒が先生となり農業体験をしてもらう。体験者の反応を踏まえながら、分かりやすく伝える。

■ 本実践とキャリア教育

高校で学習した米、野菜、りんご栽培の方法を農業初体験である相手に分かりやすく伝えるために、生徒が体験の時期や内容を計画し、応募した希望者の把握や体験時期・内容の伝達をすることで「人間関係形成・社会形成能力」や「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」が育ちます。その後数回にわたる体験を通して、体験者に分かりやすく農業体験を伝え、楽しく農作業ができたか、体験ごとに反省会を開き今後の体験活動を検討し、収穫後体験者にアンケートをとり、自分の進路や次年度の体験活動に生かすことで、「キャリアプランニング能力」が育ちます。

全体構想・年間4単位（140時間）実施

主な学習活動	時数	
調査、研究、実験 ① 米、野菜、果樹のグループで、3年間学習した内容を復習しながら、圃場状態や農産物の生育状態を調査し、それぞれ体験の時期や内容を話し合う。 ② 体験希望者がどの時期に三つの体験ができるか計画し、学校圃場での農産物の栽培管理をしながら、生徒が適時体験者に適切なアドバイスをし、農産物を育てる。 ③ 実習時はそれぞれの農産物の特性と、栽培方法、収穫方法を生徒が教えるとともに、教員と協力して体験者にけがのないように注意を払いながら、農産物の収穫を体験させる。	90	<道徳> ・ 人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かす。 ・ 自他の生命を尊重する精神、自律の精神及び社会連帯の精神並びに義務を果たし責任を重んずる。
学校農業クラブ活動 ① 体験者のけがや体を気遣えるよう、救急救命講習を何度も受けるとともに、生徒の学習や体験を日本農業技術検定3級や農業クラブ上級・特級検定に生かす。 ※農業クラブ上級検定は2年次にほぼ全員が合格するため、取得できなかった生徒のみ受験。 ② 体験を農業クラブ活動の県大会やブロック大会、全国大会などでの意見発表大会やプロジェクト発表大会で発表する。また、体験のまとめとして卒業論文を書き評価を受けるとともに、後輩にこの体験活動を引き継ぐ。	50	

更なる充実のために—他教科における学習と関連付けた指導—

公民の「現代社会」や「倫理」、家庭科の「家庭基礎」や「家庭総合」及び「生活デザイン」での学習を参考に、「自己実現と職業生活、社会参加、伝統や文化に触れながら自己形成の課題を考察させる」ことや保健体育の「保健」における救急救命について学ばせたいと思います。

《本時のねらい》

- ・ 米、野菜、りんご栽培の内、りんごの収穫体験方法を農業初体験である相手に分かりやすく伝えるため、体験者が事前に貼った果実へのシールの確認や生育状態をよく調査し、収穫体験の時期や内容を話し合うことで、人間関係形成・社会形成能力や自己理解・自己管理能力を育てる。
- ・ 3年間学んだ果樹の内容を事前に復習し、収穫時に体験者にけががなく、楽しんでりんご収穫体験をしてもらうよう、また、収穫時での社会人からの質問に円滑に答えられるようにすることで課題対応能力を育てる。
- ・ 体験を自己の進路や次年度の交流にも生かせるよう、生徒間でよく話し合わせ、まとめさせることで、キャリアプランニング能力を育てる。

《展開》

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項と評価 ○：配慮事項 ◎：キャリア教育の視点から見て特に重要なこと ☆：評価
導入	1 今まで育成してきたりんご栽培の行程を体験者に伝え、本時の収穫についての注意事項を体験者に伝える。 2 事前に質問を受け、答える。	◎ りんご収穫の注意事項や伝達事項を事前に生徒に話し合わせ、適切なアドバイスをする。 ◎☆ 体験者に作業内容を的確に伝達できたか、また質問に的確に答えられたか。
展開	3 事前に割り振られたりんご(1~2本)のシールを剥がし、「世界に一つだけの体験者のりんご」であることを強調する。 4 生徒自身が、へたを取らず、りんごを傷つけずうまく収穫作業ができるよう体験者にアドバイスをしながら共に収穫作業をする。 5 作業時は体験者にできるだけ声掛けをし、体験者からの質問に答えながら、楽しみながら作業ができるよう工夫する。 6 体験者に対し、枝によるけがの注意や、脚立などを用いた高所作業時での注意を心掛ける。	○ 計画された収穫体験が体験者にとって安全なものか、事前に現地確認をする。 ◎☆ りんごの収穫に当たり、生徒が体験者に的確にアドバイスをしているか。 ◎☆ 生徒が体験者の安全を考え、指導をしてきた教員の話をよく聴き、それを応用しながら、けがをしないよう的確にアドバイスができていくか。 ◎☆ 体験者が楽しめるよう生徒が声掛けをしながら、共に作業をしているか。 ○ 収穫したりんごを体験者と共に袋詰めをする。
まとめ	7 りんごの生育について再度参加者に伝える。 8 質問を受け、答える。 9 年間を通してりんご栽培の感想や生徒の対応について、また今後この体験をどのように工夫したらよいか等体験者からアンケートをとる。 10 りんごを持ち帰ってもらう。	◎ りんごの生育を的確に体験者に伝える。 ◎☆ 質問に的確に答えているか。 ○ アンケートをとり、りんごを持ち帰らせる。 ◎☆ アンケートを集計し、次年度の参考としてまとめ、的確に後輩に伝えているか。 ☆ プロジェクト文・卒業論文の評価。

《実践のポイント》

- ・ 異世代との交流を深め、農業の素晴らしさを広げましょう。
この実践例は、実際に実施している学校のもので、農業体験を切望する社会人は多く、そのような方々に農業高校という実際に農産物を育てる学校で体験できることは、体験者にも、そして何よりも体験者を教え、異世代交流のできる生徒にも、基礎的・汎用的能力を伸ばすよい機会となることを知りましょう。
- ・ 学習形態を工夫しましょう。
普段受動的な授業を展開しがちな学校生活の中で、生徒自らが教師となり、農業未体験者を指導することは、生徒のキャリア意識を大いに育てます。また、その体験をその場だけにせず、後輩に引継ぎ継続すること、卒業論文として評価することが大切です。

工業

1 工業科を通じたキャリア教育実践についての基本的な考え方

(1) 教科「工業」の学習で身に付ける力

工業科を含む職業に関する各教科・科目の新学習指導要領における改善の視点は、「将来のスペシャリストの育成に必要な専門性の基礎・基本の重視」「地域産業を担う人材の育成」「職業人として必要な人間性と規範意識、倫理観等の育成」の三点です。

このような改善の視点を受けて工業科の目標は設定され、『高等学校学習指導要領解説 工業編』（平成22年5月）第1章「総説」第2節「工業科の目標」では、次のように解説しています。

高等学校学習指導要領解説 工業編 第2節 工業科の目標 <抜粋>

（前略）将来、職業生活を通して自己実現が図れるよう個性や能力を伸長し、生涯にわたって継続的に学習する意欲や態度を身に付けさせるとともに、地域社会を担う有為な職業人として必要な知識や技術を習得させることが重要である。

そのため、将来のスペシャリストとして必要な専門性の基礎・基本を一層重視し、（中略）工業の社会的な役割を理解し、工業教育の特色である実践的なものづくりを通じた学習や就業体験等により、主体的に学習に取り組む態度と職業人として必要な人間性を養うとともに、ものを大切にする心を育成する。

（中略）持続可能な社会の発展を図ることができるとともに、工業技術者としての規範意識、倫理観等をもって、課題解決を図ることができる工業技術者を育成する。

（中略）これからの工業技術者には、工業技術が現代社会で果たす意義と役割を踏まえ、工業の発展が社会の発展と深くかかわっており、相互に関連しながら、ともに発展していく必要があることを理解することが大切である。

（中略）技術の進展に柔軟に対応できるよう創造性や個性を伸ばすとともに、身に付けた知識、技術及び技能を活用して、ものづくりができる創造的な能力と実践的な態度を育成する必要がある。

（中略）また、ものづくりを通して、自ら考え、課題を探究し解決する実践的な態度を育成するとともに、ものづくりにおける共同作業などを通して、言語活動の充実を図り、コミュニケーション能力、協調性などを育成する。

社会の発展は、工業の発展と相互に関連しています。したがって、上記の目標に示されているように、単に技術的課題を改善するだけでなく、自ら創意工夫することができるとともに、技術者として求められる倫理観を身に付け、より実践的な技術・技能を併せ持ち、工業と社会の発展に寄与することができる技術者を育成する必要があります。

(2) キャリア教育の視点から見る教科「工業」

上記の解説で示されている内容からも分かる通り、工業科の目標に基づいた各科目の学習は、キャリア教育における「基礎的・汎用的能力」である「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の全てを習得することにつながります。

一方、工業科を含む職業に関する専門学科では、職業の多様化、職業人として求められる知識・技能の高度化への対応が求められています。また、地域の産業・社会においてどのような人材が求められているのかを把握し、地域との連携・交流を一層深めることも大切です。

こうしたことから、工業科の各科目においては、「卒業後更に高度な知識・技術を身に付け、将来の専門的職業人として活躍できる人材の育成」や「卒業後それぞれの職業に就き、地域の産業・社会を担う人材の育成」をねらいつつ、工業科の目標を達成できるよう学習を行うことが、キャリア教育を進める上で重要なことです。

2 高等学校における工業科の指導内容とキャリア教育 —「基礎的・汎用的能力」を視点として—

工業技術は国民生活にとって欠かすことのできないものです。したがって、工業科での学習においては、自ら学んでいることが社会の中で実際にどのように役立っているのかということに意識することが重要です。このことが、学習に対する意欲を高めるとともに、将来のスペシャリストとしての自覚や、地域産業や地域社会への理解と貢献の意識を深めさせるとともに、職業人としての望ましい在り方を見つけることにつながります。

「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する工業科の指導内容の例

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
「工業技術基礎」	・ 職業生活、産業技術に関する調査、見学を通して、人と工業技術との関わりについて理解し、産業社会に積極的に参画できるようにする。	・ 工業に関する広い視野と工業を取り巻く状況の変化に対応できるよう調査、実験・実習、見学、討議等、適宜取り入れる。	・ 製品の考案から製作、評価に至る一連の製作過程を体験させ、製作途中の計測、完成後の製品検査や性能試験などを正確に行うことができる。	・ 工業技術への興味・関心を高めさせ、技術者として専門的知識と経験を生かして社会にどのように貢献すべきか、将来設計をする。
工業の各分野に関する科目（座学等）	・ 学習内容と関連する法規の目的と概要について、調べて話し合い、技術者倫理について身に付けるようにする。	・ 学習内容と実際の産業社会における工業技術との関連を意識しながら、自己実現に向けた学習をする。	・ 調査、設計、製作、観察、見学などの実験・実習や、就業体験等を伴った学習をする。	・ 自らの進路や興味・関心等に応じて、履修する科目を選択する。
「実習」	・ 安全衛生や技術者としての倫理、環境及びエネルギーなど、適時、適切な場面において指導し、技術者としての使命や責任について学習する。	・ 工業技術者として必要とされる知識と技術及び態度を一体として主体的に身に付けるようにする。	・ 「課題研究」との関連や関係する科目との関連を図りながら学習する。	・ 実習作業において、安全衛生、技術者としての倫理、環境及びエネルギーに配慮し、技術者の使命や責任について学習する。
「課題研究」	・ グループ内で、互いに助け合って作業に当たったり、意見を出し合ったりするなど、ものづくりを通して協力・協同するなかで、自分の役割を果たすことができる。	・ 個人又はグループで主体的に課題を見つけて設定し、課題解決に向けて意欲的に取り組む能力やグループ内で意見を調整するなど創造的に学習することができる。	・ 課題解決に至る過程において、これまでの学習による技術・技能を發揮し、適時に適切な手法を用いて創意工夫することができる。	・ 産業現場などにおける体験的な学習を通して、勤労の厳しさや尊さ、ものを作り上げるための苦労や感動、責任の重さなどを体得することができる。

原則履修科目として位置付けられている「工業技術基礎」と「課題研究」は、高等学校の工業科で学ぶ生徒の学習の入口と出口に位置する科目です。低学年で履修する「工業技術基礎」では基礎的・基本的な内容を実験・実習を伴って学び、より専門的な学習への動機付けや卒業後の進路について理解を深めさせることが大切です。また、高学年で履修する「課題研究」では、自らが主体的に設定した課題について、知識・技能の深化・総合化を図る学習を通して、課題解決の能力や創造的な学習態度を身に付けることを目的としており、「基礎的・汎用的能力」を身に付けさせる重要な学習であるとともに、その能力を發揮する貴重な機会でもあります。

工業科の各分野に関する科目（いわゆる座学等）と「実習」などにおける実験・実習は、相互に連携して、基礎的・基本的な知識・技能の一層の定着を図り、「課題研究」での学習につなげる必要があります。また、第一線で活躍する地域や産業界の技術者などを学校に招き、学習している内容と関連した産業界における最新の知識や技術、優れた技術・技能を身に付けたりすることで、望ましい勤労観・職業観を育成することができます。こうした地域や産業界との連携・交流は、産業界と高等学校とのパートナーシップを深め、両者が協働することでキャリア教育、地域産業を担う人材育成を進めることにもつながります。

長期の就業体験を、学校の教育活動の一環として計画し、工業科の科目の一部に替えることも有効です。長期の就業体験は、実際に地域の産業を担っている職業人と同じ職場で同じ時間を共に過ごし、直接指導を受けたり、また、評価されたりすることなどを通して、コミュニケーション能力、主体的に行動する能力や実行力を身に付け、学ぶこと・働くことの意義や役割などの理解を深めることができます。

3 実践例

《工業技術基礎》工業のもつ社会的な意義や役割，人と技術の関わりなどについて理解させる

人と技術と環境

■ ねらい

人と技術，技術者の使命と責任及び環境と技術について取り扱い，人と技術と環境に関する知識と技術を習得させる。

■ 本実践とキャリア教育

「工業技術基礎」の目標の一つである「工業の意義や役割を理解させるとともに，工業に関する広い視野と倫理観をもって工業の発展を図る意欲的な態度を育てる」ことは，キャリア教育と直接結び付いています。

工業科に関する専門の学習を円滑に進めることができるようにするための大切な科目であり，より専門的な学習の動機付けや卒業後の進路について，生徒の意識を深めさせることにつなげます。

「人と技術と環境」では，調査や見学，体験を通して，工業のもつ社会的な意義や役割，人と技術との関わりなどについて理解させることにより，特に「人間関係形成・社会的形成能力」を高めていくことができます。

《全体構想》

主な学習活動	時数	
人と技術 ○産業社会と職業生活 ○工業技術と人間との関わり ○工業技術が日本の発展に果たした役割 調査や研究，体験等を通して学習する。	2	<総合的な学習の時間> 「自己の在り方生き方や進路にかかわる課題」 <特別活動（ホームルーム活動）> 「望ましい人間関係を形成し学校やホームルームでの生活によりよく適応する」 <工業の他の科目> 「工業の各分野に関する科目」 「実習」「課題研究」など
技術者の使命と責任 ○安全な製品の製作や構造物の設計・施工 ○法令遵守	1	
環境と技術 ○人と環境に配慮した工業技術 ○地球環境や人にやさしい新技術 調査や対話，体験等を通して学習する。	1	

更なる充実のために—他教科における学習と関連付けた指導—

指導に当たっては，生徒がこれから学んでいく「工業の各分野に関する科目」，「実習」，「総合的な学習の時間」，「課題研究」などにつなげていくことを意識しながら，3年間のキャリア教育の出発点となるよう取り扱う必要があります。また，総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」の内容も参考にして指導することも有効です。

《本時のねらい》

産業構造や就業構造における工業の位置付けを学び、「仕事に就くこと」に焦点を当て、工業に携わる人間と産業社会との関わりや果たすべき役割、職業選択とその職業に必要な資格を知ることにより、自分の力を発揮して社会に貢献することについて学び、工業全体についての視野を広げさせる。

《展開》(1～3 / 6時間)

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項と評価 ○：配慮事項 ◎：キャリア教育の視点から見て特に重要なこと ☆：評価
導入	1 これから学ぶ工業の科目の中で「工業技術基礎」はどのような位置付けであるかを知り、「工業技術基礎」を通して何を学ぶのかを確認する。	○ 本時が、これから3年間の工業に関する学習の動機付けとなるようにする。 ○ 学校の教育課程におけるキャリア教育と関連させながら説明する。
展開	2 工業技術の進歩と国民の生活の発展との関連について学習する。 3 我が国の産業構造と就業構造について学習する。 4 仕事をするものの意義と幅広い視点から、職業選択をする際に大切なことについて学習する。 5 職業に必要な資格について、グループで調査・研究して発表する。 6 資格を持って職業に就いている職業人との人間関係形成等のための機会を設定する。 7 知的財産権の重要性について学習する。	○ 産業革命やその後の電磁気学の発達、近年の情報・通信技術の進展などと人々の生活との関連について学習させる。 ○ 社会生活の進展のきっかけには、技術者・技能者の努力の積み重ねや技術の研究・開発があったことについて学習させる。 ○ 「産業別分類」「職業別分類」等を紹介し、その中で工業の位置付け、工業に関連する産業における職業について学習させる。 ◎ 職業選択に当たっては、適性や能力、興味・関心を生かすことが大切であることを学習させる。 ◎ 適切な職業選択をするためには、広い視野を持ち、基本的な知識や技術及び技能をしっかりと身に付けることが必要であることを学習させる。 ○ 各グループ内で機械系、電気系、土木・建築系などの分担を決めさせ、職業に従事する際に必要となる資格や、その職業における技術・技能を証明するための資格等を調査・研究して、必要性・重要性を発表させる。 ◎ 地域で活躍する専門的な知識や技術及び技能を持った職業人からの講話を聞かせるとともに、職業についてのインタビューや対話を行わせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">『講話』 働くことの意義 職業選択の方法 資格の重要性と取得するための取組 など</div> ○ 特許や実用新案の制度、著作権などについて説明し、それらにより工業技術が守られ、発展していることについて学習させる。
まとめ	8 本時の学習を振り返り、学んだことをまとめ、レポートを作成する。	◎☆ 人と技術の関わりや、工業技術が日本の発展に果たした役割についてについてまとめることができたか。 ◎☆ 工業技術者として望ましい倫理観や勤労観・職業観について考え、勤労を重んずる態度を学ぶことができたか。

《実践のポイント》

- ・ 社会生活や将来の職業選択との関わりの中で学ばせ、工業での学びを身近に感じさせる。具体的な産業、職業を意識させ、自らが職業を通して産業社会を担っていくということを自覚させることが大切です。そのために、卒業生など、地域で活躍する若い技術者・技能者などを学校に招き、工業で学習する内容と関連した最新の知識や技術、優れた技術・技能を併せて紹介することで、望ましい勤労観・職業観を育成することができます。